

美と倫理の結合子としての虚構

—メンデルスゾーンの感覚概念をめくって—

杉山卓史

はじめに

ここ四半世紀ほどの間、美学をその語源に立ち返って「感性的認識の学」として再構成しようとする動きが顕著に見られるようになってきていることは周知の通りであるが、そこでは、いわば「カント『以前』に帰れ」が合言葉のようになってきている感がある⁽¹⁾。「カント『以前』」ということで第一に参照されているのは、もちろん「美学」の命名者バウムガルテンである⁽²⁾が、彼一人にはとどまらない。一例を挙げよう。ウィーン大学のリースマンは、「美学と日常経験」を統一テーマに二〇〇八年九月一〇月にイエナで開催された第七回ドイツ美学学会大会で開会基調講演を行うなど、近年精力的に「日常生活の感性論——美学の「感性的認識の学」としての再構成運動は、その考察対象を「美」や「芸術」に限定しないという戦略上、必然的に「日常的なもの」に注がれる眼差しが（相対的にであれ）増える——の研究を進めている研究者である⁽³⁾が、彼がこの分野へと自らの研究の舵を切ったのは、二〇〇四年の著『魅力と感動——美的感覚について——』（Liesmann 2004）であった（前述の第七回ドイツ美学学会大会の組織委員長にして当時のドイツ美学学会会長でもあったヴィージンクも「この書の著者としての」リースマンに開会基調講演を依頼したと明言している⁽⁴⁾）。

リースマンの主張は、そのタイトルにおいてすでに明確である。メインタイトルの「魅力と感動」は、『判断力批判』第一三節において「純粹趣味判断」が「依存しない」ものとして挙げられているものである。そして、その内実は言えば、サブタイトルにある「感覚」にほかならない。カントは同書第三節において「感覚という語が持ちうる二重の意味の日常的混同」を整理し、「主観のみに関係」して「認識の役にまったく立たない」表象である「快および不快の感情」と、「客観に關係」する「認識能力に属する受容性としての感官による」事象の表象」である本来の「感覚」とに区分しつつ、「快適であるとは、感覚における感官に満足を与えるものことである」と主張した (Kant 1902ff., V 205f.)。要するに、「感覚」と結びついた満足は「快適」にすぎず、「美」ではない、というわけである。

このようにカントが「快適」として排除した領域に、リースマンは現代人が日常生活において経験する「文化産業の誘惑や約束、メディアや広告産業の魅力的な提供物と、通常は肯定的な印象と否定的なそれとの間をとりとめもなく揺れ動く弱い感情」を主題化する可能性を模索している。そのために彼は、「感覚」という「カントやヘーゲルが追い出すまで、一八世紀の美学においてすでに一度は決定的な役割を担った概念」を援用するのである (Liesmann 2004, 7f.)。

「一八世紀の美学においてすでに一度は決定的な役割を担った」とはどういうことか。文芸史上の「感傷主義」や音楽史上の「多感様式」などが具体的な現象として想起されるかもしれないが、ここではあくまで思想の状況として、である。その内実(の一端)は、ほかならぬ本稿の内容をなすが、導入のために、その外的状況について補足的に説明しておこう。史上初の美学事典にして同世紀最大の芸術理論書『芸術の一般理論』(一七七―一七四年)の著者として知られるズルツァーは、そのキャリアの初期に『快適および不快な感覚の起源について』(五一―五二年)を発表している。感覚の問題に並々ならぬ関心を抱いていたのである。すでに五〇年にプロイセン王立学術アカデミー(ベルリン)の会員となっていた彼は、哲学部会長に就任する(七六年)直前の七三年、人間の心の二大能力である認識と感覚をめぐる懸賞課題を出した⁽³⁾。一等入選を果たしたのは、エーベルハルトの『思惟と感覚の一般理論』(七六年公刊)であった⁽⁴⁾。が、敗れた(ただし七一年に

別の課題——言語起源論——ですでに一等入選を経験している) ヘルダーが提出論文に推敲を重ねて七八年に公にした『人間の魂の認識と感覚について』も、美学史研究のさまざまな文脈で参照されている(7)。そして、その発端に位置するのが、メンデルスゾーンの初期の書簡体著作『感覚について』(五五年)であった。

たしかに、前後関係だけを見れば、ズルツァーの感覚論はメンデルスゾーンのそれに先立つ(実際、ズルツァーを強く意識してメンデルスゾーンは『感覚について』を執筆した(8))。が、ズルツァーの感覚論は当初、ベルリン・アカデミーにおけるフランス語講演として発表され、紀要に収録された(一七五三/五四年)際もやはりフランス語であって、独訳は一七六二年まで待たなければならぬ。ということとは、ドイツ語の“Empfindung”——“Sinn〔感官〕”“Sinnlichkeit〔感性〕”“Gefühl〔感情〕”などのように語形的に直接対応する他国語(英語で言えば“sense”や“feel”)が存在しない(9)——を主題とした理論書としては、やはりメンデルスゾーンのものが嚆矢なのである。リースマンの問題提起との接続を図るという意味でも、これに注目することは好都合であろう(10)。

こうした問題状況から、本稿では「カント『以前』」の感覚概念を説明する一環として、メンデルスゾーンの感覚概念について検討を加えることを課題とする——ただし、『感覚について』に限定せず、晩年の諸論考をも視野に収めながら。このことは、従来のメンデルスゾーン研究に対して筆者が感じる二つの不満と関係する。

第一に、『感覚について』はメンデルスゾーン美学の骨格を示した著作として、これまでも(バウムガルテンやカントにはもちろん及ばないが)さまざまに言及されてきたが、焦点はもっぱら「混合感覚(vernische Empfindung)」説のみに合わされ、「混合」ならざる「感覚」概念そのものについて十分に論じられてきたとは(前述のリースマンを含めて)到底言えない(11)。もちろん、『感覚について』に限れば、それは故なきことではない(本論にて詳述する)。が、晩年の諸論考にまで視野を広げると、事情は変わってくる。

では、その「晩年」とは、具体的にいつ以降を指すのか。第二の不満は、この点にかかわる。これまで、メンデルスゾー

ン美学は「その通時的な変化のゆえ」に注目されることが多かった⁽¹²⁾。一七六一年、メンデルスゾーンはそれまでに発表した諸論考をまとめて『哲学論集』と題して出版した。「それまでに発表した諸論考」には『感覚について』も含まれるが、新たに『ラブソディあるいは『感覚について』への補遺』を書き下ろした。ここで彼は「注記されるべき小さな誤りがある」(JubA.1383)と述べて『感覚について』に対して自己批判を展開する。このように、五五年の『感覚について』と六一年の『ラブソディ』との間には理論上の相違が存する⁽¹³⁾。

しかし、先行研究で注目されてきたのは、五五年から六一年、せいせい『哲学論集』改版の七一年——メンデルスゾーンは六一年の編集作業に対して不満を抱いていた (cf. 230, XI 190)——までの間の変化に限られる。しかし七〇年代後半以降、感覚概念は大きな変容を遂げる⁽¹⁴⁾ (それはちょうど、認識と感覚をめぐる問題がアカデミーの懸賞課題となって当時の思想家たちの耳目を集めた時期と重なる⁽¹⁵⁾)。かつ、この変容を促したものは、五〇年代の理論の内にすでに胚胎していた、と筆者は見ている。このように、メンデルスゾーンにおける感覚概念の変容を、内的必然性を伴った運動として描き出すこと、これが本稿の目的である。

美学の「感性的認識の学」としての再構成運動において、バウムガルテンのみならずメンデルスゾーンにも注目が集まりつつあることは、二〇〇〇年代後半以降の新編集テキストおよび英訳の「公刊ラッシュ」⁽¹⁶⁾ とも言うべき状況にも表れている⁽¹⁶⁾。しかし、そのようにして整備されたテキストを十二分に活用した研究が生まれる段階にはいまだ至っていない⁽¹⁷⁾。本稿がその欠を埋める一助となれば幸いである。

なお、本稿では時期区分として一七五〇年代を「前期」、六〇年代〜七〇年代前半を「中期」、七〇年代後半以降を「後期」と呼ぶ(後期のうち、八〇年代を「最晩年」と呼ぶこともある)が、メンデルスゾーン研究において定着したものではありません。便宜的なものにすぎないことを、本論に入るに先立って断っておく。

一 メンデルスゾーンの感覚概念の変遷

一、一 相対的な意欲の対象としての「感覚」——前期——

『感覚について』は、イギリスの哲学者パレモン（『哲学論集』では「テオクレス」に改名）とドイツの若者オイフラノルとの間の（メンデルスゾーン自身が編集した「架空」の）十五通の往復書簡（および「序文」と「結論」）という形を取る。ただし、実際の「往復」は二往復にすぎない。すなわち、第一〜二書簡がオイフラノルからパレモンへ、第三〜七書簡がパレモンからオイフラノルへ、第八〜九書簡がオイフラノルからパレモンへ、そして第十〜十五書簡がパレモンからオイフラノルへ宛てたものとなっている。オイフラノルの書簡が四通であるのに対してパレモンが十一通と、量的な偏りが著しい。どちらがメンデルスゾーンの見解を代弁しているのか、これまでの研究でも盛んに議論されてきた⁽¹⁸⁾が、こうした量的事実を見るだけでも明らかなのではないだろうか。ともあれ、その骨格を確認しておこう。

第五書簡においてパレモンは「多様における同一性、単一性こそ、美しい対象の財産である。美しい対象は秩序を、あるいはそうでなければ、感官が捉えるような、それも容易に捉えるような完全性を、呈示せねばならない」(Jud.A.158)⁽¹⁹⁾と述べ、バウムガルテンに連なって⁽²⁰⁾美を「感性的完全性」と規定する。これに対し、オイフラノルは第八書簡において「すべての楽しみが完全性に基づくのではない。あらゆる完全性の概念からかけ離れた感性的快も存在する。不完全性に依拠するように見える楽しみも存在する」(Jud.C)⁽²¹⁾と反論する。具体的には、自然の「ぞっとするような光景」や「血生臭い戦闘」、英雄の不幸を描く「悲劇」などである。この反論に、パレモンは結論⁽²²⁾において再反論を試みる。ここでは、悲劇に即したその再反論を見ておこう。

共感とは、われわれを魅惑する唯一の不快な感覚であり、悲劇において恐怖の名の下に知られているのは、われわれ

をただちに驚かせる共感にほかならない。……

……だが、共感とは何か？ 快適な感覚と不快適な感覚との混合そのものではないのか？ これが示しているのは、この心の動きを他のあらゆるものから区別する、明らかなメリットである。この心の動きは、不当にも生じてしまった不幸や物理的悪の概念と結びついた、対象への愛にほかならない。愛は完全性に基づいてわれわれに快を与えるはずであり、いわれなき不幸の概念はわれわれの愛するこの無実の者をより大切なものとしてその卓越性の価値を高める。

これがわれわれの感覚の本性である。楽しみという蜜のように甘い鉢に数滴の苦味が混じれば、それは楽しみという味を高めて甘さを倍増させるであろう。(110)

このように、メンデルスゾーンは「共感」＝「混合感覚」説によって、悲劇のような一見すると不快なものへの快と考えられるものも、実は完全性への快に基づいている、と主張して完全性の美学の徹底化を図る。そして、こうした混合感覚こそが「われわれの感覚の本性である」、と言う。従来(前期)メンデルスゾーン美学研究が焦点を「混合感覚」説に合わせってきた所以である。

だが、本稿が問いたいのは、あくまで「混合」ならざる(33)「感覚」である。「感覚の本性は混合感覚である」という定式は、一見すると同語反復にしか見えないが、メンデルスゾーンが言わんとしているのは、感覚の本性はその混合性、すなわち、快適性と不快適性との(激しい)交替にある、ということであろう。波乱万丈、ジェットコースターにも似た心の動きである。最後の「楽しみという蜜のように甘い鉢に数滴の苦味が混じれば、それは楽しみという味を高めて甘さを倍増させるであろう」という一文が、このことを比喩的に裏書している。ここで「楽しみ (Vergnügen)」という語が用いられている点にも注意したい。メンデルスゾーンは序文において、この著作が「彼ら」＝パレモン＋オイフラノル」が楽しみの本性について交わした」(JudA.14) 書簡である旨を明記している。すなわち、この著作において「楽しみ」と「感覚」とは同義であっ

て、「感覚」が必ずしも術語的には用いられていないのに対し、「楽しみ」の方がもっぱら術語的に用いられてきているのである。この「楽しみ」について、メンデルスゾーンは第四書簡への注においてデカルト（『情念論』「二六四九年」第九一節）に拠りつつ、次のように述べる。

デカルトは、楽しみという事象を説明することを考えた第一人者であった。ある対象がわれわれに快を与えるならば、われわれはその対象をいくばくか完全なものとみなすにちがいない、ということを経験は見出した。それはつまり、ある有名な著述家が採用した定義によるなら、われわれがある対象の表象を持たないよりは持つことを欲するならば、ということである。これは、あらゆる特殊な事例を包括する、最も一般的な定式である。（二二）

後に『ラプソディ』において、メンデルスゾーン自ら『感覚について』の中心命題と回顧している（そしてそれゆえ自己批判を加えることになる）この一節において（p. 383）、彼は「ある有名な著述家」——原注でモーペルテュイ（『道徳哲学試論』一七四九年）の名が挙げられている——に即して「楽しみ」を「われわれが持たないよりは持つことを欲する」ような対象の表象とみなしている。『感覚について』の準備草稿である「楽しみについて」と題された草稿（五五年執筆）に即してより正確に規定するならば、こうなる。「われわれが持たないよりは持つことを欲する表象を、われわれは快適な感覚と、そしてその最高度のものを楽しみと、それぞれ呼ぶ」（二二）。もちろん、裏返せば「われわれが持つよりは持たないことを欲する表象」は「不快適な感覚」である。

ここでメンデルスゾーンの力点は、「持たない」よりは「持つことを欲する」と、他との「比較」による相対的な意欲（Wollen）の対象であることに置かれているように思われる。そうであればこそ、彼は『感覚について』「結論」において「感覚の本性は混合感覚である」という一見すると同語反復にしか見えない定式によって、感覚（＝楽しみ）の本性を快適性と不快適

性との「比較」に求め、「苦味による甘味の増大」という比喩を用いているのであろう。そして、その典型例を悲劇に見出したのであった。

一・二 表象とその対象の区別―中期―

では、以上のような前期の感覚⇨楽しみの理論のどこに「注記されるべき小さな誤りがある」と中期のメンデルスゾーンは考えたのか。

この説明の内容に従うなら、われわれはあらゆる不快適な感覚を憎み、それがわれわれの魂から追放され根絶させられるのを見るのを望まねばならないであろう。が、われわれ自身に注意を向ける「⇨われわれ自身の経験に照らす」なら、不快適な感覚においてわれわれの嫌悪は必ずしも表象には向けられず、大部分は表象の対象に向けられていることに、気づくのである。われわれは、この説明が要求したように、必ずしも「不快適な」表象を持たないことを欲してはならず、多くの場合、対象が存在しないことを欲しているにすぎない。(383)

すなわち、「注記されるべき小さな誤り」とは、不快適な感覚においてわれわれの嫌悪が向かう「表象」と「表象の対象」との区分の欠如であった。「対象」すなわち『オイディプス王』を例に取るなら)父を殺し母と交わるという事態が「存在する」ことを、たしかにわれわれは欲しないが、その「表象」すなわち舞台における上演を「持つ」ことを欲する、というわけである。混合感覚は、このように説明されねばならない(ゆえにそれは、厳密な意味で「混合」ではなく、ましてや自我分裂状態を意味するものでもない)。

こうした「表象」とその「対象」との区分にメンデルスゾーンが思い至ったのは、「あらゆる表象は二重の関係に立って

いる」という洞察である(384)。すなわち、表象は一方で「その対象としての事象に対する」関係に、他方で「魂ないし思惟する主観に対する」関係に、それぞれ立つ。前者の「客観的」関係の場合、表象は対象の「像ないし刻印」——単なるコピー——にすぎない。が、後者の「主観的」関係の場合、表象とその対象との間に重要な相違——主観にとっての「規定」——が生じる。それが表面化する場面こそ、混合感覚にほかならない。「表象として、魂の認識および欲求諸力を活動させるわれわれの内なる像として見れば、悪の表象でさえも完全性の一要素であり、いくばくか快適なものを伴っている」(386)。

このように、メンデルスゾーンは前期の感覚理論が表象の客観的関係のみに立脚して主観的関係を欠いている点に自己批判を加えたのである。これにより、快適ならざる対象であっても快適なものとして表象される——近代的芸術観にとっては自明の——可能性が拓けたのである(24)。

では、このことは本稿の主題である「感覚」概念にとつては、何を意味するのか。注目すべきは、表象の主観的関係が「魂の認識および欲求諸力を活動させる」ものとされてきた点である。すなわち、「感覚」が「魂の諸力」の問題として扱われるようになるのである。別の箇所では、次のように言われる。「対象の側から、そして対象との関係において見れば、われわれはその欠陥を直観的に認識する際、たしかに不快と不満足を感覚する。しかし主体の側から見れば、魂の認識および欲求諸力が活動する、換言すれば、その实在性が増す、そしてこのことは、必然的に快と満足を引き起こさずにはいない」(386)。後期の「感覚」をめぐるメンデルスゾーンの思考は、まさにこの「魂の(能)力」(25)の問題圏の中で展開されていくことになる。

一・三 「魂の能力」としての「感覚」——後期——

一・三・一 「魂の能力」の三分法

七六年六月に執筆されたある草稿は、次のように始まる。

認識能力と欲求能力との間には感覺能力があり、それによってわれわれは、事物において快ないし不快を感覺し、承認し、是認し、快適だと思ふ、あるいは、否認し、非難し、不快だと思つたりする。われわれが関与することのない、いかなる感覺とも結びつかない思考や表象が存在する。同様に、いまだいかなる欲求にもならない感覺も、存在する。われわれはある音楽やある絵画を美しいと思ひ、それに感動することがあるが、その際に何かを欲求しているわけではな
5。(JubA, III, 276)

この草稿は、冒頭の一節から「認識能力、感覺能力そして欲求能力について (Über das Erkenntnis-, das Empfindungs- und das Begehungsvermögen)」と題されている。ここでのメンデルスゾーンは、『ラプソディ』においてはなされることのなかった「魂の能力」の細分化に着手している。『ラプソディ』では、感性的認識は欲求能力に影響を及ぼすものとされ (cf. I 416f.; II 184)、「一度だけ用いられる『感覺について』では用いられない」「感覺諸力」という語も「感覺および欲求諸力 (Empfindungs- und Begehungskräfte)」(I 393) という形で登場する。これは、『感覺について』における「意欲」の対象としての「感覺」という規定——「持たないよりは持つことを／持つよりは持たないことを欲する」——を継承するものと言えよう(もちろん、そこに表象とその対象との区分が導入されたのであるが)。しかし、後期のメンデルスゾーンは、「いまだいかなる欲求にもならない感覺も、存在する」と、欲求(能力)と感覺(能力)とを全面的には同一視できないと考えるようになる。その反証の役割を担っているのが「われわれはある音楽やある絵画を美しいと思ひ、それに感動することがあるが、その際に何かを欲求しているわけではない」という経緯である。音楽や絵画の美しさを「感覺」することとそれをわがものとする(ことを)「欲求」することは異なる、というわけである。この記述がすんなりとわれわれの腑に落ちるとすれば、それはこの記述が「閑心なき満足」²⁶⁾ というカント的——近代的——な美の規定と非常に近しく聞こえるからではないだろうか。

実際、メンデルスゾーン最晩年の著『朝の時間あるいは神の現存在についての講義』(一七八五年)が『判断力批判』成

立——とりわけ、快および不快の感情がアプオリな原理を有するという洞察——に対して与えた影響については、これまでもしばしば指摘されてきた⁽²⁾が、同書には七六年の草稿を承けて次のような記述が見られる。「人は通常、魂の能力を認識能力と欲求能力とに区分し、快および不快の感覚を欲求能力に数え入れてきた。だが思うに、認識と欲求との間には魂の是認、賛意そして満足があり、それは本来は欲求とはきわめて異なるものである」(Juda, III, 61)。

「人は通常」云々の件に涉む批判的な調子の矛先は、中期以前の自分自身にも向けられているのであろう。それはともかく、たしかに、ここで(この著作において)は「感覺能力」という語法は再びその姿を消している。しかし、主題となっているのはやはり、従来は欲求能力に還元されてきた「快および不快の感覺」の独自のありようである。ここでのメンデルスゾーンは、それを「是認(能力)」と呼び、次のように規定する。

同じ対象をさらに観察する注意を満足によって手に入れる方向を望み、これを欲求能力の作用と呼ぶというのなら、私は基本的に何も反対はしない。が、欲求の萌芽ではあるがいまだ欲求そのものではないような魂のこうした満足および不満足に、特別な名を与えてこの「欲求という」名の心の不安定から区別する方が、より相応しいように思われる。以下、これを是認能力と呼び、真理の認識および善の要求から分離することにする。それはいわば、認識から欲求への移行であり、この両能力を結びつける……。 (62)

ここでも「真理の認識および善の要求から分離」された、いわば「第三の」能力が「認識から欲求への移行」を司り、それによって「この両能力を結びつける」と、きわめてカント的な発想が見え隠れしている。

一・三・二 「虚構への傾向性」

しかし、後期の理論において注目すべきは、単に「感覚」を認識とも欲求とも異なる一個の心的能力として独立させた点のみに尽きるのではない。まず、七六年の草稿では、「認識能力と欲求能力との間には感覺能力がある」とされた後、次のような記述が続く。

認識能力の目標は真である。すなわち、認識能力を持っている限り、われわれは魂の内にある概念をその客観の諸性質と一致させるべく努力する。

感覺能力の目標は善である。すなわち、われわれが感覺能力を持っている限り、客観的性質を善意や秩序そして美といったわれわれの概念に一致させるべく努力する。……

ゆえに人間には、真理への傾向性と虚構への傾向性という、相反するかに見える二つの傾向性が存する。真理への傾向性は、認識能力がはたらく際に現れる。それに対し、虚構への傾向性は、われわれが感覺能力を行使している際に現れる。(III, 276)

この箇所は、感覺能力の目標を「善」に置いているなど、心的能力の三分法が完全には確立されておらず、その意味で最晩年の『朝の時間』の視点からすれば修正の余地を残す議論となっている。それにもかかわらず、この箇所が注目に値するのは、最後の二節における「虚構 (Erchtung) への傾向性」という感覺能力の規定である。こうした規定は、前中期には（少なくとも直接には）見られない。

同様の議論は、『朝の時間』においても、「人間が真理と同時に虚構を愛するとは、どういうことか。この相反する傾向性は、いかにして一個の主観に並存しうるのか」(JubA, III, 64) という問いへの回答として、次のように展開される。

思うにそれは、われわれが認識の際に抱く意図如何なのである。われわれは認識衝動を動かし、それによって人間を完全なものにしようとする。あるいは、是認衝動によって同じ意図を持つ、そのいずれかである。前者の場合、真理がわれわれの願望の目標である。そして、他の考察はみな、われわれにとってどれほど大切で重要であろうとも、その前に道を譲らねばならない。われわれは事物がどういう状態であるのかを知りたいのであって、われわれが事物をどう望むかを知りたいのではない。幾何学者はわれわれのくつろぎのためにその証明の厳密さをゆるがせにすべきではない。歴史家はわれわれの傾向性におもねって状況を虚構すべきではない。われわれが真理を求める時には、真理のみがわれわれを満足させる。

これに対し、是認能力を用いてそれによって「人間を」より完全なものにしようとする意図をわれわれが持っている場合、事情は異なる。こうした点から、人間は虚構を愛するのである。人間は、事物が自らの傾向性に合うように、事物が自らの満足ないし不満足を快適に戯れさせるように、事物を作り変える。「この場合」教えを受けようとしているのではない、心を動かされようとしているのである。(64f)

ここでメンデルスゾーンは、「真理」と「虚構」とを対比的に論じている。すなわち、「虚構」とは「非真理」⁽²⁸⁾、「嘘」にほかならない——ただし、「人間を(より)完全なものにしようとする」限りでの。あるいは、是認能力によって「作り変え(umbilden)」られた事物、とも言える。そして、そのようにして作り変えられた事物に「心を動かされ(bewegt)る」ことをなしうる能力こそが「感覚／是認能力」なのである。

それは、たしかに広義の「欲求能力」ではあるかもしれない。「真理への傾向性」においては「事物がどういう状態であるのか」が問題である、とメンデルスゾーンは述べるが、人間はそれについてただ「教えを受ける(unterrichtet)」のみであり、そうした事物の状態を自ら改変することはできない。これに対し、「虚構への傾向性」においては、他でもない「われわれが」

「事物をどう望むか」が問題となる。ただし、「望む」とはいつでも、事物をわがものとするという意味ではない。ここにメンデルスゾーンは「虚構への傾向性」を欲求能力から種的に区別する必要性を感じ、これを「是認能力」と呼んだのである。

これが、メンデルスゾーンの「感覚」理論が辿り着いた最終地点である。小括しておこう。「感覚の本性は混合感覚である」という一見すると同語反復にしか見えない定式に端的に示される前期の理論は、「持たないよりは持つ／持つよりは持たないことを欲する」という、他との「比較」による相対的な意欲の対象として、「感覚」（＝「楽しみ」）を規定した。これに、表象とその対象との区分という視点を導入することによって成立した中期の理論は、「感覚」を「魂の諸力」の問題として扱う途を拓いた。これを精緻化する方向で展開された後期の理論では、「感覚」が認識とも欲求とも異なる「第三の」能力（＝「是認能力」）、「虚構への傾向性」として説明されるに至った。

ここから明らかなように、メンデルスゾーンの「感覚」理論の変容は、認識とも欲求とも異なる「第三の」能力の「発見」と軌を一にしている。時期的にそれは、同じ「発見」に至ったとはいえ、カントともテーテンス——その著『人間の本性とその発展についての哲学的試論』（一七七六年）は、カントの心的能力の三分法に影響を及ぼしたものとして『朝の時間』とともにしばしば挙げられる——とも独立した思考の展開である⁽³⁹⁾。とりわけ、この「第三の」能力を「虚構」と結びつける視点は、他の二人には見られない⁽³⁰⁾。

後半では、以上のようなメンデルスゾーンの「感覚」理論の最終到達地点から再び前期の理論へと遡りながら、「虚構への傾向性」としての「感覚（能力）」という規定を用意したものを探ることにしたい。

二 美学と倫理学の合成物としての『感覚について』^{アマルガム}

—後期思想から前期思想への逆照射—

二・一 「道德論の直観的認識」への途としての「虚構」

まずは「虚構」という語の来歴から検討しよう⁽³⁾。この語自体は「感覚」の問題と切り離せば、後期になって初めて登場したものではない。一七五六年末に執筆された、『感覚について』の続編という性格を持つ草稿「傾向性に対する支配について」において、人間は「経験」、「事例」そして「虚構」の三通りの仕方ですべて「直観的認識」に達するが、「虚構」はその中で最大の効果がある、とされている (JubA, II 153)。「直観的認識」と言えば、「記号的認識」とともに、ライブニッツが『認識、真理そして観念についての省察』(一六八四年)において認識を分類するのに用いて以来、ライブニッツ・ヴォルフ学派の認識論の中心的な対概念をなす術語であるが、ここでのメンデルスゾーンは、美学というよりはむしろ倫理学の文脈で用いている。「われわれが実践的道德論の記号推論を直観的認識に変える時、すなわち、抽象概念から自然における個々の出来事に引き戻し、その適用に注意を向ける時、それによってその記号推論は意志に作用するより大きな力を得る」(152)⁽⁴⁾。ここでの「記号的認識」「記号推論」と「直観的認識」とは、前者が道德法則を「抽象概念」——「理屈」——として理解する仕方であるのに対し、後者はあくまでも実際の具体的な「個々の出来事」に即して理解ひいては「実践」する仕方である、と言えよう。もちろん、優位は後者にある。道德法則を頭で(記号操作によって)考えて実践に移すことで満足するのではなく、考えるまでもなく一瞬で実践することを目指すべきである、というわけである。「徳の価値の記号的認識を直観的認識と結びつける者は、その下位の魂の諸力を上位のそれと結びつけたのであり、完全に有徳である。記号的認識に満足する者は、有徳たらんと決心するであろうが、記号的認識よりも量的に大きな感性的快の抵抗を受けると、その決心は効果に達することがない」(II 153)。そして、そうした道徳的に理想的な状態に到達するのに「虚構」が最も有効で

ある、というのは、「自然における実際の出来事」(＝「経験」＋「実例」)よりも第一に「模倣によってより快適になる」からであり、第二に「異他の出来事と混ざり合う」からである (ibid.)。第一の理由は、無味乾燥になりがちな「経験」や「実例」よりも生き生きと学習しうる、ということであり、第二の理由は、個人が「経験」しうる「実例」には限界があるが、「虚構」はそれを補完してくれる、ということである。

二・二 自殺論

ともあれ、ここで確認しておきたいのは、後期の「感覚」理論の中心契機である「虚構」を、前期メンデルスゾーンは倫理学の文脈で用いている、ということである。『感覚について』にしても、美(学)の問題のみを扱う著作ではない。「パレモン」(「テオクレス」という登場人物の名がシャフツペリの『道徳家たち』(一七〇九年)のそれからの借用であることが示すように (cf. I:43)、倫理(学)の問題をも扱う著作なのである。メンデルスゾーンは、第四書簡への注において「楽しみ」を「われわれが持たないよりは持つことを欲する」ような対象の表象と規定した(一・一参照)後、次のように述べている。「さて、感覚の理論が道徳論に影響を持つ限り、デカルト説は経験によって確証された定理とみなしうる。道徳論者はこのことを自然論者と共有し、自然論者が経験によって知られる運動の一般諸法則に依拠するのと同様、感覚の一般諸法則に依拠するのであって、それ以上の原因を気にかけることはなく」(II2f.; cf. 127)。

『感覚について』が扱う倫理(学)の問題とは、具体的には「自殺」の是非をめぐる問題である。その流れを確認しておこう。第五書簡でパレモンは美を感性的完全性と規定していたが、厳密に区分するならば、美が「多様における単一性(Einheit, Einheit)」であるのに対し、完全性は「多様における一致性(Einhelligkeit, Übereinstimmung)」であり、「創造の真の究極目的」(59)ともされる。ここから、ライプニッツの最善説 (cf. 63) に依拠した神学的議論が展開され、第七書簡では「偶然的」の事物の結びつきであるこの世界が最も完全な世界である」という考えに反対し「この世界の仕組みに不平不満をぶつけ

る」者が「愚か者」として批判される(68)。これに対し、オイフラノルは第九書簡でこうした「愚か者」を擁護しようとする。「彼らが……その嘆きの中に一種の安らぎを見出しているのであれば……人はこうした不幸に慰めを与えているのである。彼らの嘆きは創造主の善意の証明である」(75)。そして、その極端な例として「絶望のあまり自殺に走る不幸な者」(76)を挙げる。もちろん年若い(という設定の)オイフラノルは、現時点でそれに同調して自殺しようとは考えていない。が、「時とともに不安や倦怠そして苦悩が人生に入りこんで」(ibid.)きたらどうなるかは分からない、と言う。ここでオイフラノルは、イギリスの哲学者リンダムア⁽³³⁾の自殺擁護論を引き合いに出す。それは二点よりなる。(一)「代数学者は人生における善を正量に、悪を負量に、そして死を零に擬えるだろう。善悪を加算して正量が残れば、その状態は死よりも望ましい。相殺されれば、零に等しい。負量が残れば、何がそれよりも零を選ぶことを妨げるというのか」(JudA, I 78)。(二)「神は自殺者に現存在を贈った」がゆえに、自殺者は「神の権利を侵害している」とされるが、「こうした過重な贈り物から解放されたいと思う」こともあるわけで、「こうした行為が神の意志に反しているという確信はどこにあるというのか」(79)。その上でオイフラノルは「このイギリスの哲学者の根拠を検討し、君の感覚の理論に照らして吟味せよ」(ibid.)とパレモンに迫る。こうしたオイフラノルを、パレモンは第十三書簡において「自殺が性格の道徳的善を印づけるものだと思っているのなら……君は間違っている」(94)とたしなめるのである。

こうした両者の議論は、どこまで行っても平行線を辿り、それ自体としては、当時流行った自殺論⁽³⁴⁾の一下コメント以上の意味を持たないように思われるかもしれない。が、本稿において注目したいのは、パレモンが以上のようにオイフラノルをたしなめた後、次のように続けていることである。「道徳的善一般に対する印なのではない。舞台はそれ独自の道徳性を持っている。人生においては、われわれの完全性に基づかないものは道徳的に善ではない。これに対して舞台上では、激しい情念にその根拠を持つものはみな、道徳的に善なのである。悲劇の目的は情念を喚起することである。ゆえに自殺は、演劇的には善なのである」(JudA, I 94)。すなわち、パレモン(＝メンデルスゾーン)の自殺に対する態度は「実人生では悪、

舞台上は善」であって、基本的には第七書簡の立場からいささかも譲歩していないが、「舞台上の善なる自殺」との対比で自殺擁護論に反論を加えているのである。第九書簡でオイフラノルが舞台上の自殺を引き合いに出している——ヴォルターの『ザイール』（一七三二年）におけるオロスマンやレッシングの『ミス・サラ・サンブソン』（一七五五年）におけるメレフォントは悪役扱いであるが、彼らが愛するザイールやサラの遺体を前にして悔恨の情から自殺する時、「われわれの不興は共感に変わる」のであって、「こうした類稀なる変化は何に由来するのか」、「ほかならぬその時点での自殺が……彼らの善を印づけている」のではないか (P. 4)——ことが伏線となっているのだが、これに対してパレモンは舞台上の自殺の是非と実人生のそれとの峻別を説いているわけである（ここに、後期理論における「心動かされることを欲するが、わがものとすることを欲しない」という、欲求能力からの感覚／是認能力の独立の萌芽を看取することもできよう）。

このように、『感覚について』においてすでに、舞台という「虚構」が自殺の是非をめぐる倫理的議論において大きな役割を担っている。かつ、そこでも「共感」が焦点となっている。すなわち、自殺の是非をめぐる倫理的議論と、悲劇における「不快の快」を説明するものとしての「混合感覚」説とが、この虚構という一点に収斂しているのである (35)。

パレモンは、第九書簡でオイフラノルからリンダムア説を「君の感覚の理論に照らして吟味せよ」と迫られた後、すぐに（＝第十書簡で）答えてはいないが、それは答えに窮したわけでも答えを焦らしたわけでもない。パレモンは第十書簡を「君は偶然にも私の考えを先取りしている」(Jud. I 81)と書き出す。その考えとは何か。「魂はその身体の完全性についての十分な表象に達するであろう」(83)という考えである（パレモンはこれを「われわれの理論に即して楽しみの起源を説明する十分な根拠」と自負している）。ここでパレモンは「神経管は幾千もの迷宮のような回路を繊細に交錯している」と説明する「解剖学者」を引き合いに出して「魂」を「身体的行為の観察者」とみなしている (82c)。さらに、第四書簡と同じく、注でデカルトの『情念論』(第九四節)に言及している (114)。これらのことから、ここでのパレモン（＝メンデルスゾーン）は「心身問題」を意識していることが分かる（『情念論』がエリーザベトから提起された心身問題に対するデカルトからの

回答の書であることを想起されたい。すなわち、第七書簡までの「楽しみ」（＝感覚）の理論は「魂」の側からの説明に偏っていて「身体」からの説明が欠如していた、心身協働の究極の破綻例とみなしうる自殺⁽³⁶⁾をめぐる議論がこのことを思い起こさせてくれた、というわけである⁽³⁷⁾。

この第十書簡以降は、『感覚について』の実質的な結論と言ってよい。なぜなら、第八書簡における「不完全なものへの快」という異論に「混合感覚」説をもって答える「形式上」の「結論」は、編者メンデルスゾーンの設定によれば、内容的には第十書簡以前に置かれるべきものだからである。「オイフラノルは、パレモンとオイドクスとの会話に参加したいという欲求をもちや抑えられなくなった。彼は二人のもとへと旅し、このイギリスの哲学者から生きた教えを聴くべく、しばしこの教えに満ちた往復書簡を中断することにした。しかしそれは、パレモンが第八書簡に答える前のことであった」(JudA. 1107)⁽³⁸⁾。

おわりに

以上、本稿では「感覚」概念に即してメンデルスゾーンの思想の変遷を追ひ、その最終到達地点から前期の理論を逆照射することを試みた。これにより、これまで過小評価されがちであった後期の理論は、前期の理論からの必然的な展開の結果とみなすことが可能になるのではないだろうか。もとより本稿は、メンデルスゾーン像の刷新などといった大それたことを目論んではない。ただ、カントによって近代美学の主要概念としての地位を追われた「感覚」概念のリハビリテーションに向けた、一概念史的基礎作業たらんとしたのみである。

文献表

引用箇所

JubA: Mendelssohn 1971ff.

Altmann, Alexander, 1998 (1973). Moses Mendelssohn. A Biographical Study. London / Portland (OR): Littman Library of Jewish Civilization.

有福孝岳他編 1997.『カント事典』弘文堂。

Baumler, Alfred, 1967 (1923). Das Irrationalitätsproblem in der Ästhetik und Logik des 18. Jahrhunderts bis zur Kritik der Urteilskraft. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.

Böhme, Gernot, 2001. Aisthethik. Vorlesungen über Ästhetik als allgemeine Wahrnehmungslehre, München: Fink (2005. 『藝術哲学』のついで美論』井村義他訳、勁草書房)。

Gerhard, Anselm, hg. 1999. Musik und Ästhetik im Berlin Moses Mendelssohns. Tübingen: Niemeyer.

Gesse, Sven, 1999. Moses Mendelssohns Theorie der Empfindungen und die Poetik der Mischform. In: Gerhard hg. 1999, SS. 117-34.

Godel, Rainer, 2002. "Eine unendliche Menge dunkler Vorstellungen": Zur Widerständigkeit von Empfindungen und Vorurteilen in der deutschen Spätaufklärung. In: DVjs 76, SS. 542-77.

Grau, Conrad, 1993. Die Preussische Akademie der Wissenschaften zu Berlin. Eine deutsche Gelehrtengesellschaft in drei Jahrhunderten. Heidelberg / Berlin / Oxford: Spektrum.

Guyer, Paul, 1997 (1979). Kant and the Claim of Taste. 2nd. ed.. Cambridge: Cambridge UP.

- 2011. Mendelssohn's Theory of Mixed Sentiments. In: Moses Mendelssohn's Metaphysics and Aesthetics. Ed. by Reimier Munk. Dordrecht/Heidelberg/Berlin/New York: Springer, pp. 259-278.
- Harnack, Adolf, 1900. Geschichte der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 3Bde. Berlin: Reichsdruckerei.
- Hartkopf, Werner, 1992. Die Berliner Akademie der Wissenschaften. Ihre Mitglieder und Preisträger 1700-1990. Berlin: Akademie.
- Hartung, Gerald, 1994. Über den Selbstmord. Eine Grenzbestimmung des anthropologischen Diskurs im 18. Jahrhundert. In: Der ganze Mensch. Anthropologie und Literatur im 18. Jahrhundert. Hg. von Hans-Jürgen Schings. Stuttgart: Metzler, SS. 33-53.
- Herder, Johann Gottfried, 1994. Schriften zu Philosophie, Literatur, Kunst und Altertum 1774-1787 (Werke in zehn Bänden, Band IV). Hg. von Jürgen Brummack & Martin Bollacher. Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker.
- 岩城見一 2001.『感性論―開かれた経験の理論のために―』昭和堂。
- Juchem, Hans-Georg, 1970. Die Entwicklung des Begriffs des Schönen bei Kant. Unter besonderer Berücksichtigung des Begriffs der verworrenen Erkenntnis. Bonn: Bouvier.
- 金田千秋 2005.『カント美学の根本概念』中央公論美術出版。
- Kant, Immanuel, 1902ff.. Gesammelte Schriften. Hg. von der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften. Berlin: de Gruyter (1999-2006.『カント全集』全二十二巻、岩波書店。ただし、『純粹理性批判』への参照指示に際しては慣例に従って原著第一版の頁数(=“A”)／第二版の頁数(=“B”)を記し、「覚書 (Reflexion)」への参照指示に際しては“R”の略号とともに断片番号を併記する)。
- Kaus, R. Jeremy, 1995. Moses Mendelssohn als Psychologe der Ambivalenz. Die Aktualität seiner Theorie der "gemischten Empfindungen". In: ZRGG 47, SS. 17-36.
- Kulenkampff, Jens, 1994 ('1978). Kants Logik des ästhetischen Urteils. 2., erw. Aufl.. Frankfurt am Main: Klostermann.

- Liessmann, Konrad Paul, 2004. Reiz und Rührung. Über ästhetische Empfindungen. Wien: WUP.
- 2010. Das Universum der Dinge. Zur Ästhetik des Alltäglichen. Wien: Zsolnay.
- Mendelssohn, Moses, 1971ff. (1929ff.). Gesammelte Schriften. Jubiläumsausgabe. Stuttgart-Bad Cannstatt: frommann-holzboog.
- 2005. Jerusalem oder über religiöse Macht und Judentum. Hg. von Michael Albrecht. Hamburg: Meiner.
- 2006. Ästhetische Schriften. Hg. von Anne Pollok. Hamburg: Meiner.
- 2008. Metaphysische Schriften. Hg. von Wolfgang Vogt. Hamburg: Meiner.
- 2011. Morning Hours. Lectures on God's Existence. Trans. by Daniel O. Dahlstrom & Corey Dyck. Dordrecht/Heidelberg/Berlin/New York: Springer.
- Menke, Christoph, 2008. Kraft. Ein Grundbegriff ästhetischer Anthropologie. Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- 小田部胤久 2001. 『芸術の逆説』東京大学出版会。
- 2007. 「ヴォルフとドイツ啓蒙主義の暁」『理性の劇場』(『哲学の歴史』第七卷) 中央公論新社、四一―七四頁。
- 2008. 「移行」論としての『判断力批判』―『美学』の内と外をめぐる―」坂部恵・佐藤康邦編『カント哲学のアクチュアリティ―哲学の原点を求めて―』ナカニシヤ出版、八八―一一九頁。
- Pollok, Anne, 2010. Facetten des Menschen. Zur Anthropologie Moses Mendelssohns. Hamburg: Meiner.
- Saunders, Gerhard, 1982. Mendelssohns Theorie der Empfindungen im zeitgenössischen Kontext. In: Humanität und Dialog. Lessing und Mendelssohn in neuer Sicht. Hg. von Ehrhard Bahr, Edward P. Harris & Laurence G. Lyon. Detroit: Wayne State UP, SS. 237-48.
- 杉山卓史 2010. 「日常生活の感性論としての貨幣の感性論―ガブリエルとシンメル―」『美学』第三三七号、一―一二頁。
- 津上英輔 2010. 『あじわいの構造―感性化時代の美学―』春秋社。
- Wiesing, Lambert, 2008. Eröffnung des VII. Kongresses der Deutschen Gesellschaft für Ästhetik "Ästhetik und Alltagsferfahrung" vom

29. September bis 2. Oktober 2008 in Jena. http://www.dgae.de/downloads/Lambert_Wiesing.pdf (2011年12月16日確認)。

吉田直子 2011. 「芸術の力 Kraft」— ユグマリオンによるヘルダーの造形芸術経験の分析 — 『美学』第三三八号、二五—三六頁。
Zelle, Carsten, 1999. Verwöhnter Geschmack, schauvolles Ergötzen und theatralische Stiflichkeit. Zum Verhältnis von Ethik und Ästhetik in Moses Mendelssohns ästhetischen Schriften. In: Gerhard hg. 1999, SS. 97-115.

註

- (1) もちろん、カント的な「感性」に依拠して再構成を試みるものもある。Cf. 岩城 2001.
- (2) Cf. Böhme 2001; 津上 2010.
- (3) 近年の代表的なものとしては Liessmann 2010 を参照。「日常生活の感性論」については、筆者も別の機会に論じた。
Cf. 杉三 2010.
- (4) Cf. Wiesing 2008.
- (5) 「魂は二つの根源的能力(そのすべての性質および作用の基礎)を持っている。認識する能力と感覚する能力である。前者を行使する時、魂は自らの外部にあるものとみなして好奇心を寄せる対象に占められる。その時、その全作用はよく見るだけに思われる。後者を行使する時、魂は自らとその状態に占められ、調子の良し悪しを感じる。その時、その作用は、調子が悪いと感じれば状態を変えようと、調子が良ければ享受しようとするだけであるように思われる。以上を前提として、一、両能力および両能力が従う普遍法則の根源規定の正確な展開、二、両能力の相互依存的関係および相互影響方式の徹底的な考察、三、一人の人間の天才と性格が「両能力の」程度、強度そし

- て精彩に、また、両能力が到達した進歩に、そして両能力の間にある関係にいかにか依存しているかを明らかにする基本原理、を知りたい」(原文フランス語、ヘルダーの独訳からの重訳。Herder 1994, 1076)。アカデミーの歴史については、Harnack 1900⁷ Hartkopf 1992 および Grau 1993 の他、後継組織であるベルリン・ブランデンブルク学術アカデミーのウェブサイト (<http://www.bbaw.de/die-akademie/akademiegeschichte>) を参照 (二〇一一年一月十六日確認)。
- (6) エーベルハルトは、カントが『純粹理性のすべての新しい批判は古い批判によって無用とされるべきである』という発見について『『純粹理性批判無用論』において再反論を試みた相手として知られる。この書が『判断力批判』と同じ一七九〇年に公刊されていることから、『判断力批判』はまさにエーベルハルトとの抗争のなかで書かれたといっても過言ではなから(金田 2005, 327)。なお、カントもアカデミーの課題に興味を持って手稿に書き留めている (Kant 1902ff., XV 57 [R158])。
- (7) 最近のものとして吉田 2011 および同稿が肯定的に参照する Menke 2008 を参照。
- (8) 『感覚について』では名を挙げていないが、準備草稿「楽しみにについて」では名を挙げてその理論の要点を書き留めている (JubA, I 128)。ズルツァー (およびその他の先行思想) との関係については Sander 1982 および Godel 2002 を参照。
- (9) 以上が本稿で採用する訳語である。しばしば訳し分けが困難であり、『Empfindung』にはこれまで「感情」の語が充てられることも多かったが、有福他編 1997 に拠る。
- (10) 語形自体も、分離・解除を意味する接頭辞“emp.” (=“ent.”) と動詞「見出す (finden)」との組み合わせであり、「見ること (= 視覚) から「離れる」という、反視覚中心主義的美学 (ヘルダーの「触覚の美学」を念頭に置いている) とのつながりを予感させる。
- (11) E.g.: Kaus 1995; Gesse 1999; Liessmann 2004, 31f.; Guyer 2011.

- (12) Cf. 小田部 2001, 111.
- (13) メンデルスゾーン自身も、それが文字通りの意味で「小さな」ものではないことを自覚している。「基本的な説明においては、きわめて小さな誤りでも、考察の過程においてきわめて重大な過ちに至ることがありうる」(ibid.)。
- (14) 七〇年代後半以降のメンデルスゾーンの思想に(とりわけ美学的見地から)言及したものととして小田部 2007 および Pollok 2010 があるが、前者は「ヴォルフとドイツ啓蒙主義の暁」の一コマとしての断片的な言及であって前期の思想との連関について言及がなく、後者は広く「人間学」という視点からメンデルスゾーンの思想全体を捉えようとする意図からか、必ずしも「変化」を描いたものではない。こうした後期メンデルスゾーン思想の「無視」は、『朝の時間』において自ら告白している (JubA, III, 3) 神経衰弱に起因するのかもしれない。Cf. Almann 1973, 271.
- (15) ただし、その時期のメンデルスゾーンの諸論考にアカデミーの懸賞課題を意識した形跡はなく、逆にエーベルハルトやヘルダーの論考にメンデルスゾーンを意識した形跡もない。
- (16) Cf. Mendelssohn 2005; Mendelssohn 2006; Mendelssohn 2008; Mendelssohn 2011.
- (17) Pollok 2010 は、その数少ない例外である。
- (18) Pollok 2010, 169 がまとめている。
- (19) 前述のように『感覚について』は『哲学論集』にほぼそのままの形で再録され、生誕二百周年記念版全集 (JubA) はどちらの本文も収録しているが、煩雑さを避けるため、五五年の単行本版の頁数のみを記す。
- (20) ただし第二書簡で「どんな哲学者に聞いても、美は完全性の判明ならざる表象に基づく、という」(48) と、マイアーの『全芸術の基礎』(一七四八・五〇年) 第二三節の規定が引かれており、当時の思想家の多くと同じく、メンデルスゾーンもマイアーを介してバウムガルテン美学を理解していたことが窺える。なお、メンデルスゾーンは一七五八年にマイアーの同書の抜粋の論評を『芸術文庫』に寄稿している (cf. IV 196-201)。

- (21) 「だが、君があらゆる楽しみへの根拠を完全性か美に見出したと思っっているなら……残念ながら私は君に賛成できない」(72)。
- (22) 結論は一方から他方への書簡という形ではなく、編者＝メンデルスゾーンによる「地の文」という形を取っているが、以下の議論は「デュボスが言及した、痛みを伴う快適な感覚の起源をどう説明するか、という点で彼らは容易には一致しえなかった。最終的にパレモンが発言して難点を次のように除去しようとするまでは」(108) という記述に続く箇所でなされたものである。
- (23) ただし、Kaus 1995 は「メンデルスゾーンの思考回路(たしかに不安定で手探り状態ではあるが)の最先端が目指しているのは、非混合的『純粹』感覚などというものは、人間のような無限を目指すけれども結局は有限の存在には基本的に存在しない、ということなのである」(31)と解釈する。
- (24) この点と以上の変化を促した外的契機——レッシングおよびニコライとの間で交わされた『悲劇にかんする往復書簡』とバークの『崇高と美の觀念の起源』(一七五七年)——については小田部 2001, 第三章 2 を参照。
- (25) “Kraft”と“Vermögen”とを併用しているがゆえの表記である。この点は次節で検討する後期も変わらない。ちなみに Menke 2008 は、ヘルダーのバウムガルテン批判に即して〈能力↓力〉という美学のパラダイムシフトを指摘している。
- (26) 「関心とは、われわれが対象の实在の表象と結びつける満足である」(Kant 1902ff., V 204)。
- (27) E.g. Beunler 1967, 93f.; Kulenkampf 1994, 207f.; Gyger 1997, 376; 小田部 2008, 116. 以下に對し、Pollak 2010, 345-51 は両者の間に影響関係を認めることに消極的であり、とりわけカントが七〇年代後半にメンデルスゾーンとは無関係に(すなわち『朝の時間』に接する以前に)「第三の能力」に言及している (cf. Kant 1902ff., XV 85 [R222]) ことを Juchem 1970, 89 以下にも指摘している。
- (28) 「真理と仮象について」と題された草稿(一七八一年一月執筆)における次の箇所も参照。「魂の積極的な力に基づ

- く認識はみな、真理と呼ばれる。その逆は非真 (unwahr) である。われわれが真であると思っている非真理は錯誤である。こうした思いなし (Dafühlen) の根拠が諸感官の性質に見出されるなら、仮象である」(III, 278)。
- (29) カントにかんしては注27を、テーテンスにかんしては有福他編197の当該項(執筆者：高橋克也)を参照。
- (30) たしかにカントは、その天才論において経験を(あまりに日常的に映る時には)構想力によって「作り変える」と述べている(Kant 1902ff., V 314)が、「虚構」という語そのものは——たとえば『純粹理性批判』『誤謬推理』章で「夢」と併置する(cf. A377)など——否定的な意味で用いるのみである。
- (31) 当時の「虚構」論と言えば、バウムガルテンが『美学』において感性的認識の完全性をもたらす六品質のうちの一つとしての「真理」について論じる文脈で登場するそれ(第五〇五―二五節)が想起されるかもしれない(cf. 小田部2001, 第一章)が、後期メンテルスゾーンにおいて心的能力との関係で言及される「虚構」との間に(少なくとも直接的な)影響関係を認めることは難しく、本稿では両者の関係には立ち入らない。なお、バウムガルテンは『形而上学』第四九〇節において“*factio*”と“*etwas erdichtete*”という独訳語を充てている。
- (32) 『感覚につづつ』にも使用例がある(160, 66)。
- (33) キルドン(Charles Gildon, 1665-1724)の筆名。一六九五年、彼はこの筆名で友人ブランド——九三年、病死した妻の妹との結婚を望んだが、当時の法では違法となることに絶望して自殺した——の遺作集を編集し、その自殺を擁護する論陣を張った。cf. Altmann 1998, 62f.
- (34) Cf. Hartung 1994.
- (35) 美学と倫理学との関係につづてはZelle 1999も参照。
- (36) Pollok 2010, 325に於て。
- (37) この後、パレモンは第十一書簡で改めて「楽しみ源泉」として「多様における単一性すなわち感性的美」、「多様に

おける一緻性すなわち完全性」そして「われわれの身体の性質の改善された状態すなわち感性的快」の三つを（心身両面からバランスよく）挙げる（前二者には第五書簡への、最後者には第十書簡への参照指示が、それぞれ付されてゐる。Juba, I 85）。この三つの「源泉」と後期の理論における心的能力の三分法との関係については、他日を期したる。 Cf. Pollok 2010, 352.

(38) もちろん、形式的にでも「混合感覚」説を「結論」に置いた意味は小さくない、という反論もありえよう。なお、「オイドクス」は、書簡の伝達役のイギリス人で、リンダムア説の信奉者 (cf. 64: 97)。

付記 本稿は平成二三年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）の助成による研究成果の一部である。